



医療法人三慶会 指扇病院グループ 地域ニーズに応え、充実の医療・ 介護サービスをワンストップで提供



医療法人三慶会 指扇病院グループ

理事長

鈴木 慶太 氏

指扇病院健康管理センター センター長

鈴木 祥江 氏

急性期医療を担う「指扇病院」を中心に、長期療養を支える「指扇療養病院」や「介護老人保健施設びわの葉」などの施設を運営し、幅広く地域医療に貢献している医療法人三慶会指扇病院グループ。患者さまやその家族が抱えるさまざまな悩みや不安にもグループ全体で連携して寄り添い、患者さまそれぞれのステージに合わせたきめ細やかな支援により、地域住民の健康を守っている。

2026年4月には、新たに建設した「指扇病院 健康管理センター」がオープンする。これにより、人間ドックや各種健康診断などの予防医療を一段と強化し、予防から急性期、回復期、慢性期、そして介護までをワンストップで展開できるようになる。同法人の理事長である鈴木慶太氏と、副理事長で健康管理センターのセンター長に就任する妻の鈴木祥江氏に、地域医療に対するこれまでの取り組みや新施設への思い、今後の方針などについてお話を伺った。

LEADER'S PROFILE

理事長 鈴木慶太：91年帝京大学医学部卒業後、同大学附属病院第二外科で研修を受ける。99年、父が理事長に就いていた三慶会が運営する指扇病院に移り、2000年に院長を務める。2009年、三慶会の理事長に就任。学生時代は中学から大学までクラブ活動の卓球に打ち込み、高校時代はインターハイ出場の一歩手前まで勝ち進み、大学では医学生の間東大会で優勝の経験も。現在の趣味は、プロ野球やプロレスなどスポーツ観戦。

センター長（副理事長）鈴木祥江：帝京大学医学部では鈴木慶太氏と同期。同大学附属病院第二内科で研修を受ける。2005年に開設した指扇病院グループの笹目クリニック（埼玉県戸田市）で院長を務め、2026年4月の健康管理センター開設にともないセンター長に就任する。小学生のときに「風と共に去りぬ」をテレビで見て以来の洋画ファン。好きな俳優はクリント・イーストウッド。深く印象に残った映画はロバート・デ・ニーロとアル・パチーノの「アイリッシュマン」。

2026年4月、待望の予防医療の拠点 「健康管理センター」を開設

——2026年4月、待望の「指扇病院 健康管理センター」がオープンします。まずは、このタイミングで開設に至った経緯と、その狙いについて教えてください。

理事長 これまで指扇病院グループでは、二次救急を中心とした急性期医療とその後のリハビリテーション、長期療養が必要な方の慢性期医療、そして介護老人保健施設での介護サービスなどを提供してきました。健診は、当初は指扇病院で通常の診療の合間に行い、患者さまと受診者さまが混在していました。15年程前からは指扇療養病院

内の一部を改修して健康診断部として独立させましたが、スペースは手狭で、慢性期病院内ですので設備は最小限でした。健診にも注力するべく、独立した健診専門の施設を開設するという構想はかなり前からあり、2020年の三慶会50周年記念事業として本格的に検討が始まりましたが、コロナ禍をはじめとした紆余曲折を経て、今回ようやく実現することができました。

センター長 今回の健康管理センター開設は、三慶会が掲げる「地域の皆様にワンストップで医療を提供する」という理念を一步進め、具現化したものです。医療費が膨らむなか、国はいま予防医療を重視しており、健康を維持し続けられるような取り組みを推進するようになっていきます。こうした方針



健康管理センターの外観と
センター内女性検査エリア



に沿って、健診によって地域住民の日頃の生活習慣の見直しや改善、さらには早期発見により早期治療につなげていきたいと考えております。

——健康管理センターの特徴はどのような点でしょうか。

センター長 市民健診から人間ドック、予防注射まで、全受診者さまが可能な限り不安なく快適に過ごせるような健康管理センターにしたいと考え設計しました。居心地の良い空間で、継続的に受診したいと思っただけのような施設を目指しています。単に健診で終わらせるのではなく、グループ内でその後のフォローを含めたトータルサポートができることが大きな特徴です。また、さいたま市西区には子宮がん検診施設がなく、今回の導入は地域の女性のお役に立てることと思います。女性エリアを設置しレディースドックも始めますので、幅広い年齢層の女性に安心してご利用いただけます。脳ドックなどの臓器別オリジナルドックと、がんのリスク検査をはじめとする多彩なオプションなど、ご希望に応じたメニューをご提案することができます。なかでも「膵臓チェックプラン」は実施している施設は少なく、指扇病院には膵臓の専門医が在籍しているので、特におすすめです。

理事長 設備面でも妥協せず、AI技術を搭載した胸部レントゲン、マンモグラフィーや内視鏡、

AI技術で撮影時間が大幅に短縮され、ドーム内に美しい映像を投影しリラックスできる環境を提供するMRIなど、最新設備を搭載した画像診断機器を導入します。異常が見つかった場合、希望される方にはグループ内の指扇病院で専門医による精密検査や治療に移行できるという連携こそが強みになると考えています。企業向け人間ドックや健診などを幅広く受け付け、受診者さまの健康をサポートするパートナーでありたいと考えています。

父が医院を立ち上げ、18年かけて三慶会を設立

——これまでの三慶会、指扇病院の歩みについて教えてください。

理事長 昨年3月に亡くなった父が、1970年に埼玉県戸田市笹目で「鈴木医院」を開業したのが三慶会のスタートで、開業からわずか3年で隣接地に86床の「鈴木病院」を開設しました。自宅は病院に近く夜は帰ってくるのですが、夜中でも救急搬送があるたびに呼び出されていました。このような父の姿を見ていた小学生の私は、子供ながらに「医者というのは大変な仕事だな」と感じていました。後に鈴木病院の病床は指扇に移動するのですが、父は三慶会発祥の地を大切にしたいとの考えがあったため、鈴木医院の跡地に現在家内が院長を務める笹目クリニックを開院したわ



鈴木病院

けです。この地で長らく医業を続けてきましたが、健康管理センター開設にあたり家内がセンター長に就任するため、2026年3月、父の1周忌を以って閉院することになりました。

センター長 笹目クリニックは、後に鈴木病院の病床を移動させることになった際「ルーツを大切にしたい」という義父の強い思いから2005年に開院、当初非常勤で勤務しておりましたが、10年ほど前から私が院長を務めています。クリニックに通院されている高齢の患者さんのなかには義父をよく知っている方もおり、時には鈴木病院時代に義父の手術を受けたという方もいます。当時の義父の話を聞くととにかく優しくて人気があったようで、地域の方々に慕われていたことがよく分かります。

——そして1982年に指扇病院を開設されています。

理事長 指扇病院は当初230床の急性期病院でしたが、院長に人を得ず厳しい状況が続きました。父の心労もかなり強かったのですが、幸い鈴木病院に院長を招くことができ、2年後に父が指扇病院院長に就任しました。医師の確保に難渋する時代でしたので、最低限の人数で効率のよい診療を続けていたのですが、1993年に医師、看護師の数は急性期病院より少なくて済み、在院日数を強く気にする必要がない療養型病床群制度が導入されるといち早く半分を療養型病床に転換し、今でいうケアミックスの病院として安定した経営ができるようになりました。1998年、鈴木病院を立

ち上げてから18年後に医療法人三慶会を設立することとなります。

——当時の指扇病院はどのような状況だったのでしょうか。

理事長 1990年代、埼玉県の人口急増にともなう増床許可が積極的に出されていた時期に、幸いなことに150床増床の許可を獲得することができました。療養型病床で経営が安定化したことを鑑みた父は、2000年、増床の150床に指扇病院の90床を移動させ、長期療養が必要な患者さんの受け入れを専門とする完全な慢性期病院とした指扇療養病院240床を開設し院長に就任しました。これにともない、指扇病院は140床の急性期病院に転換したのですが、私はこの直前に院長に就任しました。当時35歳でしたが、常勤医が少なかった人員体制のなか、病院運営に奔走するとともに、父の下で病院経営に携わることになりました。2003年には戸田市の鈴木病院の86床を、医療圏をまたいでさいたま市に移動する許可を得ることに成功しますが、これは比較的異例なことではないかと思えます。これにより指扇に病床を集約するという長年の構想を実現させ、指扇療養病院に西館を増設、326床の慢性期病院となり後に48床を回復期リハビリ病棟に転換しました。

——医療圏をまたいで病床を移動させるということは難しいことなのですね。

理事長 医療圏をまたいでの病床の移動には行政の許認可が必要なため簡単ではないと思います。父がそのとき行政や関係者の方々とのような交渉をしてこれを実現させたのか詳しくは分かりませんが、信頼関係や交渉力があったのだらうと思います。2003年に指扇療養病院が326床となったことが、三慶会にとって大きな転機になったと感じています。

ワンストップ医療の提供に邁進

——2011年には指扇病院を現在の場所に移転して新設されました。

理事長 2009年に理事長を承継しました。院



長就任時から積極的に救急搬送を受け入れていたのですが、満床のため救急要請を断らねばならないことが少なくなく、大きな問題となっており現状に合った病床機能に調整していきたいと考えていました。築30年に満たない建物ではありませんでしたが耐震構造ではなかったこともあり、2011年、指扇療養病院西館の86床を移動し新築移転しました。指扇療養病院西館は、2012年に90床の介護老人保健施設「びわの葉」に転換することができ、新たに介護との連携体制を構築することができました。このようにして急性期175床、回復期51床、慢性期240床、介護施設90床と、三慶会にとって理想的な病床機能に整えることができ、2度目の転機になったと思います。医師数は8名から病床機能の調整に従い少しずつ増員し40名に、従業員数は2003年の500名から850名となりました。

——移転したいまの指扇病院は、病棟全体が明るくゆったりとした雰囲気なのが印象的です。設計の際にはいろいろと工夫されたりしたのでしょうか。

理事長 現在の指扇病院の建設にあたっては、効率的な動線で極力コンパクトにまとめることを第一に考えました。病棟の廊下はクランクがなく、ベッドが余裕をもってすれ違えるよう十分な幅を取りました。病室の面積は当時の基準より広めに確保しています。特にこだわったのは、リハビリ病棟と同じフロアにリハビリ室を、手術室内に血管撮影室を設置したことです。多くの病院のリハビリ室は1階にあり、外来のリハビリ患者さまとの共有を大切にしていたのですが、指扇病院では入院患者さまのリハビリに重点を置いたということです。病棟内にリハビリ室を配置することで入院患者さまのエレベーターでの移動や、車いすの患者さまに付き添う看護師の負担を減らすことにつながりました。リハビリの効率は上がったと思います。



現在の指扇病院



指扇病院の待合室（写真上）とクランクのない幅広い廊下（写真下）

センター長 病院施設ではありませんが、指扇病院グループは清潔感のある快適な看護師寮を6棟有しており、エアコンや電子レンジ、洗濯機など生活に必要なものはほとんど完備しています。家賃は極力抑え、駅から近いのでプライベートも充実させることができます。安心して長く勤務してもらいたいとの考えから、働きやすい環境づく

りの一つと考えています。結果的にそれが優秀な看護師の確保につながり、患者さまへの質の高いサービスにつながっていると感じています。

——改めて病院経営において理事長が大事にしている点というのはどのようなことでしょうか。

理事長 病院経営が健全でないと、良質な医療は提供できません。近年は診療報酬の改定が必ずしも物価や賃金の上昇分を補填できていないという現状があり、病院経営、とくに急性期病院の経営は非常に厳しいということは周知されています。指扇病院グループでは、回復期リハビリ病棟や指扇療養病院を有効に稼働させ、急性期病床を効率よく回転させることで、グループ全体の経営の安定化を図るよう心掛けています。例えば高齢の方の転倒で多い大腿骨頸部骨折を受傷して救急搬送され急性期病棟に入院し手術を受けた場合、術後経過が悪くなければ速やかに回復期リハビリ病棟に転床し集中的なリハビリで在宅復帰を目指します。もし自宅に退院するのが困難な場合は、指扇療養病院に転院し可能な限りのリハビリを継続することができます。患者さまにとって、病態に応じた最適なケアがワンストップで受けられるという点が、大きなメリットになっていると思います。

これからも地域で選ばれ続ける医療を

——現在までこの地域で診療を続けてきたなかで、とくに思い出に残っているようなことなどはありますか。

理事長 25年以上に及ぶ診療経験の中で、25年以上通院してくれている患者さまもおります。最近100歳になられて、総理大臣から贈られる百歳高齢者表彰状を持参され「先生のおかげで長生きできました」と言ってくれた方がいて、医者冥利に尽きると感じました。その方は入院歴、手術歴もありますが、月1回しっかりと自分の足で歩いて通院できておりますので、非常に感慨深く心から嬉しく思います。

センター長 長くかかりつけ医として診療して



看護師寮

いると、ありがたいことに「先生の顔を見ると安心できます」「すべて先生にお任せします」などと言ってくれる方がいらっしゃり、強く信頼していただけていると実感できます。一人ひとりの患者さまと真剣に向き合い、信頼関係を築いていくことの重要性を感じます。クリニックの閉院が決まり、長年通院してくれていた患者さまを診察できなくなると思うと、とても名残惜しく申し訳ない気持ちになります。

——今回の健康管理センターが開設されることで、ワンストップサービスの体制がさらに強化され、完成形を迎えるわけですが、最後に今後に向けた目標について、改めて教えてください。

理事長 指扇病院グループは昨年55周年を迎えました。本年4月に健康管理センターがオープンすることで、グループの理念としている「ワンストップの地域医療」はひとまず完成します。短期間の目標として、生活習慣病の発症を防ぎ、疾患の早期発見に努めることに注力し、たくさんの方々に繰り返しご利用いただける健康管理センターにしたいと思います。そのうえで、急性期医療をさらに充実させ、予防医療、早期発見から地域住民の健康寿命を延ばすことに貢献したいと思います。

センター長 心筋梗塞などの心臓病や脳卒中、最近ではがんも生活習慣病に分類され三大生活習慣病と言われるようになり、日本人の死因の半数近くを占めています。生活習慣病は偏った食事や運動不足、飲酒、喫煙、ストレスなどが原因となりますので、日常生活の見直しによって予防する



55周年のロゴデザイン

ことができます。生活習慣を変えていくのはなかなか難しいので、健診で血液検査や画像検査による数値、画像で可視化されることで客観的に評価し、ご自身の健康状態を把握していただくことが大切です。私たちは受診者さまがしっかり把握できるよう丁寧にわかりやすく説明し、適切なアドバイスをすることで皆さまの健康をサポートしたいと考えています。医師、スタッフが連携し、質の高い健診とサービスを提供できるよう努めていきたいと思ひます。

理事長 医療は技術だけではなく安心を提供しなければいけないと考えます。地域の皆さまに「指扇病院に行けばどんな時でも安心しててもらえる」と言っていたような、健康を守る若でありたいと思ひます。今回開設する健康管理センターは、そのための新しい窓口として活用していただける施設となることを願っています。これからも心の通った医療を提供していくことに徹し、地域の皆さまから選ばれる医療機関を目指し邁進してまいります。

取材後記

武蔵野銀行 指扇支店
萩原 孝明 支店長



医療法人三慶会・指扇病院様は、1982年の開業以来、さいたま市西区指扇の地で数多くの医療を支えてこられた、まさに“地域密着型”の総合病院です。16に亘る多彩な診療科を備え、先進の検査機器で迅速・精密な診療ができることが最大の強みであるほか、療養病院や介護老人保健施設も運営し、予防から急性期・回復期・療養期まで一貫したワンストップ医療を日々担われています。

今般、2026年4月にグランドオープンされる「指扇病院・健康管理センター」は、理事長ご夫妻が長年目指されてきた『地域の皆様の健康寿命を守りたい』という“夢”そのものであり、歴代支店長からバトンを引き継ぎ、その夢の実現に立ち会えたことは、支店長冥利に尽きます。

私たちの健康をしっかりとサポートいただける施設ですので、是非、行員・パートナーの皆様にも、人間ドック・健康診断等ご利用いただければ幸いです。



■医療法人 三慶会 概要

運営施設：指扇病院（1982年9月開設）

さいたま市西区宝来 1295-1、TEL 048-623-1101

指扇療養病院（2000年10月開設）

さいたま市西区宝来 1348-1、TEL 048-623-1102

指扇病院附属 笹目クリニック（2005年9月開設）

戸田市笹目 5-20-10、TEL 048-421-5121

介護老人保健施設 びわの葉（2012年3月開設）

さいたま市西区宝来 1348-1、TEL 048-623-1102

指扇病院 健康管理センター（2026年4月開設予定）

さいたま市西区宝来 1343-1、TEL 048-623-1104

取引店：武蔵野銀行指扇支店